BRITISH MONETARY EXPERIMENTS 1650——1710 (1960)

By J. KEITH HORSEFIELD

THE LONDON SCHOOL OF ECONMICS AND POLITICAL SCIENCE & HARVARD UNIV. PRESS

合田裕作

十七世紀のイギリス経済の直面した最も重要な問題は雇傭水準の安定と資本不足の問題とであつた。このような表現法をとつた方が過去における低開発国としてのイギリスを、その後の、及び現代の低開発国の経済発展との関連においてリアライズするのに都合がよいわけである。アシュトンがインド的生活水準という比較法を使つたのはエコノミック・チェインジの章においてであつて、歴史的個性として発明を扱うこととは正反対のアシュトンであるにせよ、発明史の章においてではなかつたわけである。これはつまり経済学の用語が歴史的個体ではないということである。全く別の文明に属した、たとえば徳川吉宗の直面した経済問題との不思議な——実は不思議でも何でもない——類似性におどろくことは、オランダ解剖図譜が日本人の体内を予知したことに驚くことでもあろう。しかし、勿論、幸いにも、現状は我々が歴史家——歴史学者ではない——であることをやめねばならぬほど調査研究がゆきとどいてしまつているわけではない。

以上のまえおきを必要と考えるのは、ホースフィールド氏のこの論考を、善玉 vs. 悪玉的単純さや勧善懲悪的明快さの経済史物語を読むつもりで見ては全然面白くないのでないかと心配してのことでもあるが、われわれがとくに強調したい点が、この著者の仕事が事実において一六五〇——一七一〇の貨幣的文献のすべてにわたつてその理論的内容の評価を行なつてはいるが、ブラウグの『リカード』やタッカーの『利潤論』（一九六〇年刊）の行なつたような学説史の歴史的肉づけの点にではなく、当時の経済の貨幣的側面をあきらかにした点に置かれるからである。学説史家との関係について言うなら、文学を問題にする文学史とモルネの文学史との関係がこの場合に思い出されてもよい。この前者に当るものとしてミンツのシャープな「銀行理論史」（一九四五年刊）をいま思い出したからである。

著者はF・W・フェッター、F・J・フィッシャー、R・S・セイヤーズ、J・B・ヴァイナーの諸教授及びL・S・プレスネル博士の援助とはげましとに感謝している。最後の人の仕事を私は知らない。はじめ四人の教授達の仕事は我々にファミリアであるが、この家族の銘々が独自の仕事をしていると同様に、ホースフィールド氏の仕事も氏じしんのものである。氏のこれまでの仕事について、寡聞の私の読みえたところではアシュトンやセイヤーズ編の『英国貨幣史論集』（'53）に収められた、戦時中に発表された、十八世紀末から十九世紀初頭にかんする四篇の論文、「一六九四～六のインフレーションとデフレーション」（エコノミカ Aug., 56）がある。

学説史家の練習場の観を呈する時代にかんする初期の仕事に落穂拾い的性格が見られたことは否定できないが、ファクチュアルなベースで仕事をしたいとの著者の初志がここに実を結んだことを大いに喜びたい。現在の著者が十九世紀初頭の経済史の貨幣的側面についてどのような手順で仕事をすればよいと思つているかを想像することは興味深いがこれは本稿の枠を外れる。

本書は序文と第一部ファィナンシャル＝バックグランド四七頁、第二部銀四八頁、第三部金一八頁、第四部紙幣一二五頁、結論の部二七頁、付録として物価、貨幣価格、貨幣供給量の統計その他に二四頁、文献目録と索引七〇頁、とからなつている。一見したところいかにも貨幣の材質によつて、或はおカネの色彩に従つて分類しただけのようにも見えるが構成は緊密である。通貨（銀）の改鋳問題から出発してその後の経過に及び、ここで銀から金への主役交替を見（十八世紀初頭、ニュートン在職当時のことである）、「資本不足」問題の解決策としての紙券信用に至つている。第四部の章別けを政府歳入、商業手形、土地と担保としての確実さの順を追つて行つたと言はれるのはユーモアであろうか。土地銀行が ch. 14 から ch. 17まで頁数にして六二頁を占めたのは、改鋳及びイングランド銀行については著者のオリジナリテが接近方法におかれるのに対し、土地銀行については文献の開発じたいに価値がおかれたためにそれだけのスペースを割くことを必要とされたのであろう。フィッシャー教授が構成上どのような示唆を与えたかはつまびらかでない。

改鋳問題については著者はC・R・フェイの「ロック vs. ラウンズ論争」（Cambridge Hist. J. '33）、Li Ming-Hsun の the Great Recoiuage of 1696-99. Univ of London. Ph. D. Thesis. '40 から出発している。この分野にはフィーヴェリヤ「ポンド・スターリング '31、クレイグ「ミント」'53、バクスター「トレジャリ一六六〇——一七〇二」'57 などの仕事がある。ここで著者は以上の仕事をビバリッジ、ハバカック、シュムペター夫人、サプルなどの仕事（第一部・ファイナンシャル・バックグランド）と対照することによつて貨幣的な諸現象相互間の関係をあきらかにするための枠組みを考えた（ch. 3）。この論争の理論的内容を批判的に見れば、これが一八一〇年のビリョン・コミッティーや一九一八年のカンリフ・コミッティーと共通の政策をうちだしたという考察にみちびかれる。経済分析の歴史にこの論争が新しい観念を寄与したわけではないが、論争の要具がとりもなおさず当時の一般経済学の内容であつたこと、ラウンズの論争のかけひきのまずさに対する、ハリファックス卿の学友ロックの巧妙な、錦の御旗的な道徳論の使用（クェーカー教徒の発言さえ当時としては滑稽事としては無視できなかつた事情）なども興味がある。結論として言えることは、これは紙幣の部についても言はれることであるが、乗数効果、ヴェロシティなどの考えが萌芽としては散発していたが、論策が通貨の流通数量の把握にもとづいて行はれなかつたわけだし、十九世紀についてのフリードマン及びその系列の人達の厳密に数量的な研究のようなものがそのまま十七世紀について我々に出来る筈もないということになる。しかし勿論、改鋳の貿易に対する影響を購買力比価説で考えたり、ホーム・トレードに対する所得効果を推量することは可能なわけである。この関連で最近のうれしい驚きは何茲全「東晋南朝的銭幣使用与銭

幣問題」（『歴史語言研究集刊』第十四本、一九四九年刊）を教えられて読めたことである。この問題についての岡崎文夫先生の論考もよいものであるが、何茲全氏は一歩進めて貨幣的攪乱の問題を貨幣数量と物価変動の趨勢のタームで考察しながら経済史学の一つの基準を明示している。

第四部のうちイングランド銀行についてはすでにスコット「株式会社」'12-'14、リチャーズ「イングランドにおける初期の銀行業務」'19、「初期のイングランド銀行」'34、クラッパム「イングランド銀行」'44 などの名著がある。ホースフィールド氏としては当然クラッパムをマークするわけである。同氏のとつた方法は銀行業務の実際によく通じているレオン・シックがエレンブルグその他の著書、論文を素材にして、フッガーの事業活動を再構成したのに似ている。つまり銀行業務のセオリー&プラクチスから考えて、銀行の資産運用、正金保有率などについてはとくにクラッパムより厳密である。そしてもつと広い枠では、ドメスチック・エコノミー、貿易、救貧のために購買力の供給を増加するための手段としての紙券信用論が綿密に検討されている。紙幣に対する反対がインフレーションの危険をみてのことであるよりは、むしろマーカンチリズムの立場から来ているとするヴァイナーやヘクシャーに対して、紙幣のインフレーションの国内価格や国際収支えの危険はすでに認識されていたと説くことはその一例である。ヴァイナーやヘクシャーがとくに粗雑な本の読み方をしているとは思えないが、マーカンチリズムという概念を考える必要を感じずに、いはば低空飛行をした著者の読み方がキメの細かいものであつたことはよくわかる。

さいごに四つの土地銀行計画について。これについての文献開発に貢献したことははじめにふれた。これらの計画は一つ一つとしてはさして重要なものではないが、これらが相つづいてあらはれている点が購買力の拡大（生産及び消費の）のための何かの手段をみいだそうとの根強いうごきのあらはれとして重要と著者は見ている。仕事の終りに当つての著者の感懐がある。一六五〇――一七一〇年の六〇年間の貨幣文献の読みにくいのを読んで来てあきらかになるのはそこにあるのが一つのヴィゴラス・アドベンチュアラス・エコノミーの世界であつて、これらが力をあつめて九〇年代の貨幣、信用制度上の多くの試みの爆発的出現を準備したのであつたと。受益者である読者の側から言えば、この面での仕事は始まつたばかりであり、新しい仕事は後から後から出て来るわけである、しかし、未知の世界の開拓に乗り出して行く力強い冒険的なイギリス経済の息吹きを我々に伝えてくれる方法においてこの著者の貢献が独自のものであると、こう言はねばならない。